

自然素材を使ったクラフト体験教室

11/18 (土) 海・山の恵みを使った フォトフレーム作り



講師 伊勢志摩国立公園 自然ふれあい推進協議会 いしのせとしま 登志雄さん

国立公園内で採取したシーグラスや貝殻、木の実や枝などを組み合わせてオリジナルのフォトフレームを作りました。参加した子どもたちは、並べ方を考えながら一生懸命自分で選んだ素材を接着し、思い思いの作品に仕上げていました。

お知らせ

第7回石原円吉賞 候補者の推薦を募集します！

石原円吉賞は例年7月ごろ募集を開始し、伊勢志摩国立公園の指定日(11月20日)にあわせて表彰式を行います。伊勢志摩国立公園の最大の魅力は、人と自然の関わりを感じられるところで、今後も同国立公園の保全や活用に取り組み、魅力ある地域づくりを行っている方々の活動にスポットを当てていきます。推薦の受付期間や表彰式の日程については、詳細が決まり次第、ご案内いたします。皆さまの推薦をお待ちしています。

11/19 (日) 石のお絵描き

講師 鳥羽東中学校 上村 ひかるさん

お絵描きを使う石は、伊勢・鳥羽・志摩・南伊勢の海岸で拾ってきたもの。大小さまざまな石から好きな形のものを選び、ポスターカラーペンなどを使って、色とりどりに描きました。



石原円吉 いしはら・えんきち (1877~1973)
三重県英虞郡和具村(現在の志摩市志摩町和具)出身。実業家で国や県の政界でも活躍。水産業発展と海の保全に尽力した。戦前から伊勢志摩の国立公園の指定にも貢献し、戦後、伊勢志摩国立公園協会初代会長に就任。昭和46年海の博物館を開館した。

このチラシに関する問い合わせ先
(一財)伊勢志摩国立公園協会
〒517-0011 三重県鳥羽市鳥羽1丁目2383-51
TEL & FAX 0599-25-2358
ホームページ <https://www.ise-shima.or.jp/>
メール ise-shima@ise-shima.or.jp

11月20日は伊勢志摩国立公園の誕生日

世界水準のナショナルパークを目指す
伊勢志摩国立公園

初春の便り



Semi-Annual
Vol.12

発行/(一財)伊勢志摩国立公園協会、三重県 編集協力/(株)アイブレン

第6回石原円吉賞

表情晴れやかに 2団体1個人が受賞

伊勢志摩国立公園の指定日を地域の方々とお祝いし、親しみを持ってもらうことを目的とした記念イベント「Happy Birthday!伊勢志摩国立公園」が、11月17日~19日の3日間、鳥羽マリンターミナルで開催されました。今年で6回目を迎える同イベントでは、伊勢志摩国立公園の保全や活用にご貢献する団体や個人を表彰する「石原円吉賞」表彰式と記念講演、自然素材を使ったクラフト体験教室が行われました。

石原円吉賞とは…

戦後初の国立公園指定の実現に尽力した、志摩市出身の政治家石原円吉(1877年~1973年)の志を継承し、同国立公園の「地域文化の継承」や「適切な活用」「動植物の保護」「美化」などに貢献した個人や団体を表彰するものです。



日々の活動や自然体験などを通じた 熱心な取り組みが評価

今年の「石原円吉賞」は、他薦による候補者から「お伊勢さん観光ガイドの会(伊勢市)」と「白龍どんぐり小屋の会(鳥羽市)」、同国立公園協会会長推薦の特別賞として写真家の泊正徳さん(志摩市)が選ばれました。それぞれに表彰状とミズメの木で作った置き時計が授与され、選考委員を代表して櫻井治男皇學館大学名誉教授より講評が述べられました。

山本会長から表彰状を受け取る「お伊勢さん観光ガイドの会」会長の喜多島さん



受賞者の皆さん(左から泊さん、喜多島さん、「白龍どんぐり小屋の会」の松本さん、崔さん)

受賞団体 伊勢市 お伊勢さん観光ガイドの会



世代や三〜次に合わせておもてなしガイド

受賞団体 鳥羽市 白龍どんぐり小屋の会



白龍大岩の前のテラスで憩い体験

特別賞 志摩市 写真家 泊正徳さん



早朝から各地で撮影を行う泊さん

お伊勢さん観光ガイドの会

“おもてなしの心”で魅力を伝える 観光ガイドをめざして

外宮界隈の賑わいを取り戻そうと、(公社)伊勢市観光協会の関連事業として平成7年から活動しています。現在ボランティアガイドは56名。伊勢に関する知識を伝えるだけでなく、「おもてなしの心でお伊勢さんの魅力を伝えるガイド」をめざして、ガイド同士の相互学習を通じた定例交流会や、県外視察などを行い個々のレベルアップを図っています。



お客様からの感謝の言葉が活動の励みに

例年約4,000件のガイド実績がありますが、そこでの一期一会のご縁や感謝の言葉は、何物にも代えがたい宝物であり喜びです。お伊勢さん観光の担い手として、お客様に感動を与えられるガイドになれるよう、品格・品位・品質を保ち経験を積みながらチーム一丸となってこれからも取り組んでいきます。また今後は、後継者育成や外国人向けガイドの活躍の場の拡大にも力を入れていきたいです。

選考委員講評

コロナ禍を経ての活動に力強さを感じた。日ごろから熱心に勉強を積み重ね、ガイドを通して直接的に発信されている姿に感心するとともに、今後は神宮の歴史・魅力に加え、“森の奥深さ”まで伝えてほしい。



伊勢神宮(内宮)でガイドを務める喜多島さん

白瀧どんぐり小屋の会

白瀧の森を観光地化し、 地域活性に寄与

松本さん／御神体でありながら長く手つかずのままだった鳥羽市船津町の白瀧の山。地元のために発展できないかと約4年かけて整備を進め、平成24年10月に滝行体験施設をオープンしました。その後テントサウナや瞑想体験など、地域資源を生かした体験型コンテンツを作り、魅力あるスポットの創出や観光客の誘致に取り組んでいます。また、環境保全の観点から、地元の小学生を対象に出前授業や白瀧の森での野外学習を行っています。



崔さん／一昨年9月から鳥羽に住み始め、伊勢志摩国立公園の各エリアを全て回ったところ、フィールドを生かした自然や歴史文化を知る“ここならではの”体験がたくさんある事に気づきました。それらをもっと外国人観光客の目線で発信できれば、興味関心や誘客につながると感じ、ご縁があって昨年4月から白瀧の活動に参加させていただくことになりました。時期を同じくして、観光庁により富裕層インバウンドのモデル観光地と同国立公園と周辺エリアが指定され、それらの層に特化した専属ガイド付き貸切修行体験メニューの提供も始まりました。今後は、同国立公園内NO.1の自然体験施設を目指したいです。

選考委員講評

自然に囲まれた素晴らしい場所で、「滝行」を通して精神性にまで及ぶ体験ができ、“深い地域の魅力”を発信している。海外誘客にも力を入れていることから、これからの活動に期待したい。



写真上：野外学習の様子
写真下：年4回以上、生物多様性保全モニタリングや水質調査を実施

特別賞 写真家 泊 正徳さん

まだ見ぬ“伊勢志摩の美しさ”を求めて

伊勢志摩国立公園の魅力は、言うまでもなく風光明媚な景色と自然、そしてそこに住む人々の温かさです。撮影時に心掛けているのは、そこにある自然と対話し、そこに暮らす人々とひとつになること。これからも、力の続く限り「知っているようでまだ知られていない伊勢志摩の魅力」を再発見し、多くの人に発信していきたいです。

伊勢志摩の風景や伝統文化を写した作品の数々



甲賀城ノ崎の夜明け



安乗文楽



安乗漁港から見る浮き富士

選考委員講評

長く地域に根を下ろし景色を見ているからこそ素晴らしい写真につながっている。この地域で見られない「浮き富士」のように、“ディープな国立公園の魅力”を今後も発信し続けてほしい。

第6回 石原円吉賞 記念講演

「式年遷宮とともに永遠に続く 伊勢神宮の森林管理」



式年遷宮とヒノキ

20年に一度、内宮、外宮、別宮の社殿をすべて造り替える「式年遷宮」では、ヒノキの木を約1万本使います。約1300年前に行われた第1回目では、伊勢の地の天然ヒノキが使われていましたが、当時は伐採後に植林するような山づくりは行われていないことから、500年間ほどでヒノキが枯渇し、その後は、三重、愛知、岐阜県に良材を求め、現在は長野県と岐阜県の木曽ヒノキを遷宮用に供給いただいています。

しかし、遷宮に使うものはできるだけ自給自足で行いたいという思いと、式年遷宮は絶対に絶やしてはいけないという強い思いから、大正12年に立てられた「神宮森林経営計画」において、この地でヒノキ林を再生することとなりました。この計画に沿った森林管理が始まって、今年でちょうど100年目になります。

100年前のSDGs

「神宮森林経営計画」では、神宮のエリ

アを神域・第一宮域林・第二宮域林に分けています。神域と第一宮域林は禁伐とし、第二宮域林で式年遷宮用のヒノキ林を作ろうという方針です。ヒノキを育てる上では、ヒノキだけの人工林にせず、生物多様性につながる針広混交林に仕立てる方針が取られています。また、木を育てて伐って植えてと、循環させて持続的に活用する考えも取り入れられています。100年前の当時から、SDGsのような考え方が森林計画に盛り込まれていたのです。先見性のある計画であったことから、今も神宮の山づくりの基本方針として色褪せずに生きています。

これまでの成果

これまで100年間取り組んできた森林管理の成果としては、戦前戦後の混乱期や昭和、平成、令和と、時代が変化してきた中でも、方針がぶれずに守られ持続的に管理が行われていることが最大の成果だと思っています。結果、貴重な生態系などの維持に結び付いています。ヒノキも順調に育っており、先の式年遷宮では約700年ぶりに、間伐材ですが、伊勢の地で育ったヒノキが使われました。メインで使うヒノキになるには200年程度かかるので、あと100年しっかり育てていきます。

また、針広混交林に仕立てていることで、



講師：神宮司庁 営林部長 **松永 彦次** さん

五十鈴川の水源涵養にも役立っています。近年、集中豪雨が増えてきている中、神宮の山では平成以降、砂防や治山のための新規の堰堤を施工していません。樹木の成長により土砂崩壊を防ぐ機能が高まっているように思います。

循環する山づくりへ

一般の林業では50~80年で伐採することが普通です。神宮の森は200年かけて育てるという全国でも前例がない山づくりのため、100年を超えた人工林の手入れは現場で試行錯誤をしながら進めています。

現在育成しているヒノキ林の面積は約2500ヘクタールで、式年遷宮25回分に相当するヒノキを育成する予定です。1300年前は500年で伐り尽くした山を、今回は500年周期で循環させていく山づくりを目指しています。こうした森林管理を日々続けることにより、式年遷宮をはじめとする神宮の営みが未来永劫に続くよう、取り組んで参ります。

